

学内 SNS を活用した産学連携授業の実践

- 貢献マインド育成授業における学外連携 -

山名和樹・横濱友一・清水啓己・三岡恵子

Email: kazuki_yamana@shotoku.ed.jp

聖徳学園中学・高等学校

◎Key Words SNS, 高大・産学連携, 貢献マインド

1. はじめに

2017年3月に告示された小学校・中学校の学習指導要領では、情報活用能力を言語能力と同様に「学習の基盤となる資質・能力」と位置づけた。また、その総則において、児童生徒の情報活用能力を適切に生かした学習活動の充実を図ることに配慮することが明記された。しかし、情報活用能力をどのように育むのかについては、プログラミング教育以外の視点からの検討はまだ不十分であり、教科横断的な取り組みについての事例も少ない。

さて、通常の教室内の授業では、様々な制限から教員と生徒間のやりとりで終始してしまいがちである。そこで、時間や場所を厭わないコミュニケーションを可能にするという SNS 最大の利点に着目し、本校で教員・生徒間で利用されている学内 SNS 「Talknote」(トークノート株式会社)を学外の大学生との連携に活用した。生徒たちが学校という枠にとらわれず、異なる世代の意見にも触れることで、新たな視点を持ち、潜在する創造性を引き出す契機となるのではないかと考えたからである。

具体的取り組みとしては、2016年度に早稲田大学大学院教職研究科武沢研究室の協力を得て、SNS を活用した心をテーマとした授業を中学2年生1クラスで試行的に実施した。そこで明らかになった効果を検証の上、2017年度に中学3年での地域貢献授業に SNS を導入することで、近隣大学学生と生徒を Talknote を通して繋ぎ、生徒達はいつでも学生から自身らの活動についての助言を得られる環境を整えた。

本稿では、これら2つの授業実践について、授業担当者、ICT 担当、サポート学生らの意見を集約することで、SNS を活用した外部連携授業の試みがどのように機能し、また、どのような課題が散見されたのかを明らかにした。

2. ICT 環境

2.1 ハード面の環境

本校では、2015年度より新規入学生は iPad を購入して入学し、2018年度現在、中学1年から高校1年生が iPad を所持している。また、全教職員もノート PC と iPad を学校側から支給され、職員会議等の会議もペーパーレスで電子化されている。

各クラスには電子黒板が導入されており、Apple 社の製品 Apple TV が備え付けられている。そのため、教員は無線で iPad 等の画面を電子黒板に表示することが可能である。さらに情報システムセンターという分掌に専任の ICT 支援員が常駐し、サポートに当たっている。

2.2 Talknote の導入

iPad を活用した学内コミュニケーションの円滑化を目指し、2014年度より学内 SNS の導入の検討を開始し、Talknote を2015年度末に導入した。その選定理由は、下記のとおりである。①機能が明解で、操作が容易なものであること。②既読・未読の確認が可能なこと。③投稿に対する返信ができること。④校内管理者がログを確認できること。

導入当初は、SNS の利用経験の少ない教員が多かったことから、段階的な運用と研修機会の提供を心がけ、教員のリテラシー向上を第1目標とした。2016年1月～3月までの間、教員間で Talknote を試用、2016年度に、生徒も含めた運用を開始。2017年度からは保護者利用を推進。しかし、保護者に関しては閲覧権限のみを付与しており、投稿に対する返信等は制限されている。2018年度からは学校からの情報発信は基本的に Talknote 上にて行われている。

3. 授業概要

SNS は物理的、時間的制約を超え、相互交流できるところに、その利点があることが先行研究で明らかとなっている(小貫, 2008)。寺石(2017)によると人間は多くの経験を積むことにより成長、進歩していく。このようなことから SNS の効果的な活用により、人間的成長の大きな柱となる経験という部分を多様な交流を通じて培われる効果が期待される。

3.1 「心の授業」とは

本校ではスクールカウンセラーが、学期に2～3回程度、「心の授業」という授業を総合的な学習の時間(以下、総合)に中学生を対象に実施しているが、その一環として本授業実践を行なうこととなった。「心の授業」とは、生徒間で心に関するテーマについて話し合うことで、心の成長に関わる新たな気づきを生むことを目的としたものである。例えば、ある授業では「行事を成功させるために、一人一人がどのような心構えを持つ必要があるのか。」ということテーマに話し合った。規定された答えはなく、それぞれが授業内での相互交流を通して感じたことを言語化することにより、心の成長へと繋がるものと理解している。

ただ、総合では他のテーマも扱っているため、「心の授業」を連続して実施できず、次の授業まで数週間の間が空いてしまうことにより授業が単発的なものとなっていた点が課題となっていた。しかしながら、SNS を活用するこ

とにより、授業内容を活字保存できるので、間が空いても生徒達にその内容を想起させることができる。その結果、連続性のある授業展開が期待できるのではないかという仮説を立てた。また、SNS 上での外部との相互交流を通して、より実社会に即した刺激を生徒達が感じることも可能となるのではないかということも期待された。

3.2 「心の授業」での SNS 活用

武沢研究室、授業担当教員で議論を重ねた結果、2016 年に実践した授業では、日々の生活を客観的に振り返る機会を設けることをテーマとした。なぜなら、日々の生活を振り返り、言語化することにより、自身の変化に気づき、自己評価が確立されていくからである。(末永, 2008)。

授業は試行的に中学 2 年 1 組の 1 クラス 27 名 (男子 13 名、女子 14 名) を対象とした。武沢研究室に所属する 10 名の院生 1 名あたり 3~4 名の生徒を割り当て、グループを組織した。クラス内での人間関係に配慮し、グループ構成はクラス担任が行った。初回の授業では、授業のねらいや SNS 活用に関するルールを説明し、その後、割り当てたグループ内で Talknote 上で、メッセージを担当学生に送った。ここでは Talknote の使い方を生徒達に学ばせるだけではなく、担当学生との初期交流の意味合いも含まれていた。授業の最後には、生徒に下記 3 項目の質問を期日までに割り当てられている学生に対して Talknote 上で質問し、回答を得よう課題を設定した。

- (1) あなたが中学時代に戻ったらやり直してみたいことは何ですか？
- (2) 中学時代に出会った一番大きなことは何ですか？
- (3) 14 歳までに知っておいた方が良いことは何ですか？

これらの質問について院生からの回答を得た後、グループ内の生徒それぞれが感じたこと、発見したことをテーマに話し合い、その内容をポスタープレゼンテーション形式で発表した。その様子は SNS を活用した授業の先駆的事例紹介として、各種メディアや外部教育関係有識者を招いた公開授業という形で実施した。

この取り組みにより、下記のことが明らかとなった。

- (1) SNS を効果的に活用することにより、生徒一人一人に普段の学校生活とは異なる視点を与えることが可能である。
- (2) SNS を効果的に活用するためには、生徒たちにその効果や必要性を十分に伝え、理解を得ることが重要である。そのために、授業担当者はクラス担任との密な連携が必要不可欠である。
- (3) SNS を活用した学外連携は大きな可能性を秘めるが、生徒と学生間で大きな心理的障壁があり、本授業実践では相互交流と呼べるところまで至らなかった。

SNS 活用の先行研究を行った野寺ら (2017) によると、授業における SNS の積極的活用を体験した学生の学習効果の向上が確認されている。本授業実践においてもその効果が確認されたが、先述した課題も表出した。そのため、さらに授業内での SNS 活用に関する研究継続の必要性が感じられた。学内検討の結果、2017 年に本授業を経験した学年に対して再度、同様の試みを異なるテーマで実践することとなった。

3.3 武蔵野市貢献プロジェクト

中学 3 年の総合では、「武蔵野市貢献プロジェクト」という授業を行なっている。これは、本校所在地である武蔵野市を舞台に、近隣大学生と協力して、問題を発見、その問題に対する解決策を提案、実行するという PBL である。創造力とは問題解決であり、新しい価値を生むことである(西浦, 2011)。社会的課題を解決するためには、まず、自分の存在や世界の諸問題を俯瞰してみることは必須と言えよう。

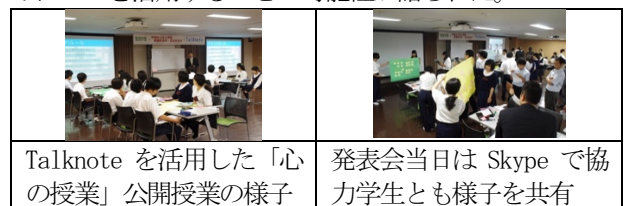
そのために、その基礎段階として、生徒達は「エナジード社」が提供する教材を活用し、4 月~10 月下旬まで、創造力の幅を広げることを目的とした授業を受講する。この教材は、21 世紀を支える生徒が自分の可能性を理解し、「今予想されている未来で戦う力」を学校教育・塾で身につけることができるよう、問題解決方法を考えさせるものである。この段階では、人と人の交わりを大切にしたい、アナログベースで授業は展開され、最終的に自分たちやグループの意見をまとめ、発表していく。

10 月下旬からは武蔵野市貢献プロジェクトへと移行する。まず、生徒達はグループに分かれ、授業支援の大学生と共に学校近郊を散策するところから始める。これにより、普段自分たちでは気づけなかった近隣課題を異なる視点から発見することができる。

その後、生徒たちはグループ内で大学生と共に発見した問題とその解決策について議論を深める。議論の末、決定された解決策は実行まで求められる。しかし、毎回の授業に大学生が来て、助言してくれる訳ではない。また、授業時間内のみでの議論に制限すると、偶発的な気づきへの対応と解決案への気づきの反映が難しくなる。そこで、リアルタイムに大学生を含むグループメンバーとコミュニケーションがとれる SNS の利便性が効果的であると考えた。これを活用することにより、距離的・時間的な制約を受けず、瞬間的な閃きや相互交流から生まれる新たな発想の展開を期待した。

しかし、現実的にはそこまでの発展的活用には至らず、教員の指示により、生徒たちはその日の授業の感想や進捗度合いをその場にはいない大学生に申告するために書き込む、言わば掲示板的な役割に留まった。学生側からの返信も既読は確認されたが、文言による返答は一部参加者からのみで期待したほどの広がりは見られなかった。

学期最後にはグループそれぞれの取り組みについて発表会を開催した。最終的に 1 つのクラスが、2018 年 2 月に本校主催で開催した、外部教育関係者対象の ICT 活用授業実践報告会「Future Education Session」で発表を行った。その際、本事業に参加した大学生とエナジード社社長氏家光謙氏による講評をいただいた。そこでは、社会的課題解決のためには思考の幅を広げるために多くの人の意見に耳を傾け、仲間と協力することの重要性と、そのために ICT を活用することの可能性が語られた。





武蔵野市貢献プロジェクト活動と成果報告の様子

貢献案は実行するところまで求められる

Talknote を使い、大学生と交流

4. 授業担当者による本授業の課題

本校の総合的な学習の時間では、以前よりアメリカの心理学者ギルフォードの知能構造理論に基づいた問題解決能力を養う「知能開発」を実施している。武蔵野市貢献プロジェクトにおいてもその観点を引き継ぎ、社会的課題解決のための創造性を重視した指導を行っている。また、これから多くの作業がAI やロボットが担う社会に変化していくことが予想される。そのため人の働き方が従来の工場生産型から、より知識を活用した活動へと変化していく。つまり、「自ら課題を発見し、それを解決するための創造力と実行する力を併せ持つ」ことが必要となる(小林, 2016)。本校ではこのような近未来社会に対応できる力を育成する目的も含め本授業を展開している。

授業内で、生徒たちは正解の無い問題が問いかけられるわけだが、直ちに答えを出すことができるわけではない。生徒たちから多様な答えを引き出すためにはグループワーク効果を最大限に生かした答えを導き出す方法を指導する必要が教員側に求められる。例えば、課題解決のアイデアを示すことに困難を感じている生徒に対し、創造性を引き出すキーワードをもらうように仕向ける。それには、周囲の人物に話しかけたり(場合によっては授業中でも立ち歩いてクラスメイトからアドバイスをもらったり)する事を教員から促がす事も必要である。これは、アクティブラーニング研究者からも「授業のパラダイムを変え、より実社会に即した環境を提供すること」の有用性が説明されている(小林, 2016)。そのため本授業では、教員がファシリテーターの意識を持って授業に望むことが重要であると担当者間で共通理解されている。

このような論理と手法で推進している「武蔵野市貢献プロジェクト」だが、多くの課題が残されている。生徒たちは積極的に問題を見つけ、アイデアを考え出し、実行しているものの、ポスターを作る、ゴミを拾うなどの単純なものであったりアイデアは面白いが実行するには現実的には実行が難しかったり、時間がかかってしまうもの(課題を SNS 上に掲載し、広く訴えかけたり、テレビ番組に電話して課題を訴え、取材に来てもらうなど)が多くなってしまった。したがって、授業実施期間内に最善策を導き出

す方法を教員側が工夫し、伝達する必要がある。また、生徒たちが市役所や公共機関などに交渉しても受け入れてもらえない事例も散見された。しかしながら、このような体験を通じて社会に出る際に必要な電話対応の方法や交渉するために必要な社会常識を中学 3 年生の段階で学ぶという意味では一定の効果が認められた。

これらの成果に加え、本授業に大学生が介入することにより、多様な意見や考えが生徒達から新たに導き出されるようになった。また、最終報告では自身のプロジェクトの概要を自らクラスメイトや外部関係者に発表する機会も与えたことにより、発信力の向上にも貢献できたものと考えられる。

5. 協力学生視点からの本授業評価

2016 年に武蔵野大学の学生と連携した「心の授業」では、教員免許状を保持している修士 1 年生 1 名、2 年生 8 名、修了生の現職教員 1 名が参加した。

顔の見えない生徒とのやりとりなので、まずは自己紹介で自分を詳しく知ってもらうことが必要であった。その際に配慮したことは、接点のない中学 2 年生が相手であるということ、理解しやすい表現で語りかけたことであった。

Talknote を利用した最大の利点は、時間と場所の制約に縛られない交流が可能なことであった。また質問に対しての答えも、熟考してから答えることが可能なことであった。これら利点は中橋ら(2017)が発見した「SNS を活用することにより思考の可視化と活動量の保証」とも合致している。

授業後の振り返りにおいて、学生側からは、「直接会ったことのない人と連絡先だけで繋がっても、生徒たちからすれば遠慮などがあって聞きたいことも聞きづらいのかなと思う。」「生徒側は特に悩みを持って連絡してきている訳ではなかったの、形式的な質問で終わっていたように思う。」「相手がどういう生徒かもっと分かれば、情報の提供もしようがあると思う。」「気軽だからこそプライベートについて聞きやすいのか、プライベートなことを聞かれて答えにくかった覚えもある。」「文字だけのやり取りなので答えないことも、とても冷たく伝わりそうなので曖昧に答えてしまったものもあった。」等の感想が挙がった。

以上のことから、時間と場所の制約を超えて学校外の世代の異なる学生と SNS 上で交流し、多様な価値観に触れたり、アドバイスを受けることは可能ではあるが、相互交流という観点においては、両者間が遠慮することなく意見を出し合えるような工夫やテーマ設定が必要であるということが明らかになった。しかしながら、課題を考え、その解決案を出し合い、実現可能にするにはどうすれば良いかという PBL においては、このように体系的な SNS の活用は大きな可能性を秘めていると感じられた。

この検証を踏まえ、2017 年に実施した武蔵野市貢献プロジェクトでは、近隣大学男子学生 5 名、女子学生 13 名が授業支援者として登録した。これら授業支援者間からの振り返りでは下記の点が主に挙げられていた。

<良かった点>「クラス、班単位で進捗状況が可視化出来た。」「時間に縛られずに隙間時間やふと思いついたときにフィードバックが出来た。」「授業に参加しない回に

生徒がどんなことをしたか把握できた。」「投稿やコメントが授業に入る際の会話のきっかけになった。」

＜改善点＞「全体的に硬い印象があり、気軽に投稿やコメントする気分にはなれなかった。」「活用方法について、生徒とTAの間に共通理解がなく、互いに一方的なコミュニケーションになってしまった。」「生徒との距離感の取り方で慎重になりすぎた。」

2016年度の授業よりも2017年度はSNSを発展的に活用することができたことがこの振り返りから読み取れた。特に、授業内容を次へ繋げるという目的、そして気づきに対する瞬間的な対応という部分においては一定の効果が挙げられたものと考えられる。その一方で、生徒・学生間の隔たりは依然として存在しており、相互交流にまで発展出来なかったことが確認された。

6. 考察と課題

6.1 意義

これらの授業実践から以下の示唆を得るに至った。

- (1) 産学連携により、生徒は普段の生活で学ぶことのできない知識や経験を得ることができた。それは従来の学校教育から一歩抜け、生徒達へ提供できる教育の幅を広げる有益性が認められた。
- (2) SNSの活用により、外部との連携がより円滑に行われることが分かった。特に大学生からの意見から理解されるように、授業進度を確認でき、自身に関わらないグループの取り組みも見られたことで学生の生徒への関わりの質が向上したということが確認できた。
- (3) SNSの利点である時間と空間の壁を超えられることが本授業実践で明らかとなった。授業時間やクラスといった枠組みに捉われない活動がSNSを効果的に活用することにより実践でき、それは生徒の意欲向上や創造的問題解決行動へと繋がったものと言える。

6.2 課題

一方、当初の意図と反して、実践を試みる中で課題となった点は下記のとおりである。

- (1) 2016、2017年度の2度にわたり授業実践を行なったが、いずれもSNSの利点の1つである相互交流にまで発展することが困難であった。大学生側の意見から推察されるように、見知らぬ他者との交流はその距離感という意味で複雑さがあることが明らかとなった。
- (2) Talknoteというアプリケーションは生徒としては学校側から利用を求められているものであり、これを開いて活動することは学習活動を行うことと同義である。そのため、授業時間外で本ツールを活用することは、心情的に積極的になれないであろうことが推測される。これは平松(2013)が明示した、「その特性や用途に合わせたSNSの選定」という視点も今後必要であろう。
- (3) 大学生側からは相互交流を行うためには、決まった時間を指定し、両者が同時にログインする必要があるが、そのための時間設定が本授業ではされておらず、結果的に掲示板のような役割となってしまうのではないかという意見があった。加えて、Talknoteは学生にとって今まで利用した経験の無い

ものであり、積極的な活用につなげるためには事前指導や生徒・学生を繋げるための「ならし利用」期間が必要ではないかと考えられた。

7. おわりに

本稿では聖徳学園中学校にて2016年、2017年の2年に渡り実施された学内SNS「Talknote」を活用した授業実践を報告した。

日本の学校教育においては、長い間、学校内のみで完結する教育が展開されてきた。しかし、社会が大きく変化する中ですべてを学校が担うには限界がある。また、生徒の創造性という側面を学校の教員だけで育むことは困難であろう。むしろ、積極的に外部の企業や大学などの連携を図り、その知見を取り入れていくべきである。コンテンツ・ベースの学力観からコンピテンシー・ベースの学力に転換していこうという今日、単なる知識や技能だけではなく、様々な心理的・社会的なリソースを活用して、特定の文脈の中で複雑な要求(課題)に対応することができる力の育成は重要である。

それらを生かすための外部連携の一手法として、今回、SNSの活用を試みた。結果的には、生徒たちの問題解決行動への刺激にはなったものの、SNSの利点の1つである創造力を活性化させる相互交流までには至らなかった。技術の発展により時間的、距離的制約を超えることは可能となったが、本校生徒と学外の学生間の心理的な隔たりを取り除く働きかけも同時に必要であり、そこに教員が介在する意味、今後のSNS活用の鍵があるのではないかと考える。

謝辞

本稿執筆にあたり、多大なご示唆、ご指導を頂いた早稲田大学大学院教職研究科教授 武沢護先生、また、社名の記載を快諾頂き、授業実践の際にも様々なご支援を頂いたトークノート株式会社代表取締役 小池温男様、株式会社エナジード代表取締役 氏家光謙様にこの場を借りて感謝申し上げます。

参考文献

- (1) 小貫睦巳: "教育支援ツールとしてsnsを使用したweb授業の効果", 理学療法化学, 23, 6, pp.729-730 (2008).
- (2) 小林昭文: "7つの習慣アクティブラーニング最強の学習習慣が生まれた!", pp.12-18, 106-108, 産業能率大学出版部 (2016)
- (3) 末永ひみ子: "特別活動における子どもの自主性を育む教師の役割", 工学院大学共通課程研究論叢, 46, 1, pp.79-80 (2008).
- (4) 寺石悦章: "シュタイナーとフランクフル:死と不死をめぐる", 人間科学, 37, p.305 (2017).
- (5) 中橋雄, 山口眞希, 佐藤和紀: "SNSの交流で生じた現象を題材とするメディア・リテラシー教育の単元開発", 教育メディア研究, 24, 1, pp.1-2 (2017).
- (6) 西浦和樹: "創造性教育の現状と創造的問題解決力の育成 -教育ツールの活用による人間関係構築の試み -", 教育心理学年報, 50, 0, p.200 (2017).
- (7) 野寺綾, 中村信次: "授業におけるSNSの活用が大学に対する態度の形成に及ぼす影響", 人間環境学研究, 15, 2, p.127 (2017).
- (8) 平松純一: "LinkedInを通じたSNSの学術利用の可能性について(若手カンファレンス報告)", 社会情報学, 2, 1, p.8 (2013).